

ごえんびと

第七回 Roots 猪苗代

大室 由佳さん



大室 由佳さん



旧山潟小学校に移転オープンした
Roots 猪苗代さん

連載コーナー「ごえんびと」

壽徳寺にご縁のあるひと(ごえんびと)に
インタビューし、想いを伺いながら
ご縁を深めます。

第七回目は、Roots 猪苗代の大室由佳さんです。
二〇二〇年秋、旧山潟小学校に移転ブランドオ
ープンした、Roots 猪苗代さん。豊かな暮らしを
多角的に提案する複合施設であり、人の駅として
の交流の場、活動も広げていらっしやいます。
アウトドアショップのマネージャー、プレーパ
ークのリーダー、またRootsさんの広報でも活躍
される大室さん。イベント開催時には、周辺の全
地域にチラシを一軒一軒配布にまわり、お顔なじ
みの方も多いのではないのでしょうか？
大室さんと猪苗代の出会い、Rootsさんとのご
縁などお話を伺いました。どうぞご覧ください。

プレーパークとは

子どもたち自身で遊びを作り出す遊び場。

「冒険遊び場」とも言われる。

子どもたちの想像力で工夫し、「自分の責任で
自由に遊ぶ」ことを大切にしている。遊び場にある
道具や廃材、自然素材を使って、自分がやりたいこ
とに挑戦し、実現していくことで、子どもが遊びを
通して豊かに育つことを支えていく遊び場。

—Roots さんでの勤務何年になりますか？

二〇一八年くらいから、Roots の敷地内でプレ
ーパークをやらせていただいています。

はじめの一年は日曜日のプレーパークのみ担当
する形で、その後営業サポートもするようになり
ました。当時は、新潟での仕事を持っており、ダ
ブルワークという形で新潟と福島を行き来しなが
らでした。二〇一九年にアウトドアブランドのス
ノーピークとRoots が業務提携し、お店をスター
トするということで、担当として二〇一九年一月
から社員として入りました。

新潟ではどのようなお仕事を

されていたのでしょうか？

新潟には十年以上住んでいまして、はじめは結
婚式場で働いていました。結婚式場で働きながら
保育士の資格は取りましたが、日々の生活に追わ
れる毎日です。保育士につながることはなにもして
なかったんです。ですが、自分の人生の転機と東
日本大震災のタイミミングが重なり、以前講演会を
聞いて感銘を受けた”森のようちえん”をやりたい
かったことを思い出したんです。新潟でも森のよ
うちえんをやっているNPO法人があることを知り、
ボランティアでいいので関わりたい、というところ
からはじまりました。

この時もダブルワークで、はじめは平日は森のようちえん、土日は結婚式場で働いてました。森のようちえんとの関わりが深くなると共に、運営するNPOでも子育て支援など事業を広げることになり、結婚式場の仕事を退職し、NPOの仕事一本に移っていきました。このNPOでプレーパークの立ち上げに関わることができたのは大きかったですね。

—— 猪苗代とのご縁をお聞かせください

私は福島市出身で、今でも休みの日は福島の実家におります。新潟に住んでいる時に、父が病気になりました。その時、新潟で交流のある方々が、Rootsのインテリアショップの運営やブランディングに携わっていたんですね。そのタイミングで、私も新潟と福島を行き来していましたので、中間地点でもある猪苗代に立ち寄ることが増えてゆくようになります。Rootsに立ち寄ると顔なじみの先輩方や手仕事作家さんなどにも会えることが嬉しかったですし、父が闘病中でしたので、自分の息抜きや癒しの時間にもなっていました。通っているうちにRootsのみなさんと親しくなり、食事したり、泊まったりすることも増えてきます。当時のRootsの敷地にも森があり、そこを活用するひとつとして、プレーパークをすることにも繋がっていきました。

—— 猪苗代のプレーパークはどのような形でスタートされたのでしょうか？

二〇一七年十一月の三連休、マルシェ開催時におためしでプレーパークを開かせていただきました。当時、新潟の仕事も抱えていましたし、父の病気のこともあり個人的に大変な時期で、猪苗代でプレーパークができることが自分の励みになっていました。

十一月三〜五日の開催で、新潟の仕事も休めず一日しか参加できない予定だったのですが、十月末に父が他界。そのことでお休みを二週間いただくことになり、全日程参加できるようになったんです。父が結んでくれたご縁だなと思いました。

感謝の気持ちで第一回のプレーパークが終了し、年が明けて一〜三月にもプレーパークを二週間に一度開催。春から毎週開催とつながってゆきました。父の死もありながら、プレーパークをやることに救われた気がします。



プレーパークでの様子

—— 長距離移動は大変だったのでは？

私にとってはドライブは思考の整理、父を思い出す時間でもあります。紅葉が綺麗な時期に土湯峠を越えて福島を往復していると、この時間も父が作ってくれたのかなど、かみしめる時間でした。向かった先の猪苗代では、みんながあなたかく迎えてくれて、ご縁だなとしみじみ感じていました。

闘病中の父がずっと心配していたのは冬の運転で、最後のプレゼントは冬タイヤでした。冬の心配をさせないためにも秋に旅立ったのかとも思っています。今でも父の車に乗りながら、父に買ってもらった冬タイヤで守ってもらっています。

—— 幼い頃から活発だったのでしょうか？

全然です。先生の言う事を聞く。やんちゃなこととはしない子でした。

根が真面目で、大学生の時も単位はしっかり取っていました。将来のビジョンが描けないまま卒業まで来てしまったんです。その時に母から新聞の切り抜きを貼ったハガキをもらったことが転機になりました。当時、日本青年奉仕協会という財団でやっていた「一年間ボランティア」という活動の募集記事でした。



具体的にはどんな活動を

されていたのでしょうか??

東京都世田谷区にある、羽根木プレーパークでのボランティア活動です。

そこで一年間、慣れない環境の中で毎日泥だらけになりながら、ただ必死に無我夢中で過ごすという場に身を投じてきました。そこでの活動をきっかけに、子どもたちをコントロールするのではなく、ひとりの人間として尊重し、大人が子どもと対等に接する世界があるんだという大きな気づきがありました。今までは全然違う世界に放り出され、衝撃を受け、自分と違う価値観と出会うことで、自分を覆っていた固い殻にヒビを入れることができたように思います。

もともと保育や教育の世界に

興味あったのでしょうか?

いえいえ。応募理由は世田谷に憧れていたからです(笑) 自身、未っ子で小さい子の面倒も見たいこともない。子どもや遊びにも興味なければ縁もありませんでした。なんにも事前情報を知らずに、世田谷に住みたいというモチベーションだけで応募しましたし、面接でもそこを強調したことを覚えていません。

後から調べると、羽根木プレーパークは日本初のプレーパークで、全国から取材も来るプレーパークのメッカのような場所でした。子どものこと

を勉強している学生などが応募することが多かったようですが、そのバックグラウンドがない私のような学生の方が、逆に場に変化が生まれておもしろいと思って選んでくださったようです。

ここでの一年の任期終了後は、違う環境を知りたいという想いから、野外教育を行う東京の民間会社に就職し、子ども対象のキャンプや自然体験事業の職に就きました。



東京での活動やその後の仕事での

ご経験は今に活かされていますか?

そうですね。時を経てすべて今に活かしていると感じています。どのタイミングでも全力でやることが大事で、どこでも学ぶことが多いです。

弊社は二〇一五年から Roots というブランドをたてて、工務店として家を建てるだけでなく「家と暮らし」を提案しています。このタイミングで Roots に出会えた、ご縁をいただけたことにも感

謝しています。プレーパークをやりたいと言った時に、通常の企業ではやろうと思わないですよ。ケガなど、なにかあったら会社の問題、責任にもなりかねません。普通だったらノーであるところを、社長が了承してくれたのは、ログハウス作りからはじまり、自然や本物の木を長年扱ってきた工務店ならではのだと思います。そのご縁に出会えたことがとてもありがたいと思います。

工務店として大切にしてきた、自然に対する尊敬、愛着というの、森のようちえんやプレーパーク、自然体験などで感じていたことに繋がります。全然違うジャンルで生きてきましたが、すべて今に繋がっています。タイミングと人のご縁に感謝ですね。

コロナ状況下の今、

心境の変化などいかがでしょうか?

コロナがなければと思う事、大変なことも多いですね。想像つかなかった未来です。

ですが、本当にやりたいことだけ集中してやればいいと言われる気がしています。晴耕雨読のように、雨が降ったり吹雪になったら外でのプレーパークは休めばいいし、必要以上に予定を入れたり、人との交流をしない。コロナの状況の中でできることを考えてやってゆく。今の状況の中で、柔軟に生きて行くことを教えられている気がしています。



でもワクワクしています。

私の肌感覚では、いい風がきているような感じがしています。Roots がここに移転して新たなご縁も生まれ、いろんなタイミングが整ってきています。こんな状況下でも必要な縁は繋がれると思います。今までもご縁に支えられてきましたが、これからご縁を大切にしていきたいですね。

——ありがとうございます

これからもよろしくお願ひします

*インタビュー・文 松村妙仁

*二〇二二年八月二十七日

Roots 猪苗代にてインタビュー

——今後考えている事をお聞かせください

地域のみなさんとつながりながら、猪苗代にとって、Roots がここに来てよかったと思えるようにしたいですね。期待される部分もあり、やらなければならぬ立場でもありますが、みんなアイデアを出し合い、様々な方からもアイデアをいただきながら進めています。

生きにくい時代かもしれませんが、身近な世界が平和であると幸せに感じます。おいしい食事だったり、近しい人との関係性であったり、今この瞬間が幸せであれば、これまでの苦労も悪くなく、つたかなと実感する毎日です。大変なこともありますが、Roots としての新しいチャレンジもすぐそこで待っていますし、新しい展開に私自身とっ

大室さんのお話を伺い、さまざまな経験とご縁が今に繋がっていることを感じました。

お父様との別れというご経験も抱え、共に生きていらっしやる。生きてゆく中で悲しい経験、寂しい経験も、なんらかの次に繋がっていることを改めて考えるインタビューでした。また深まる時間をありがとうございました。

山潟小学校は壽徳寺の寺小屋からはじまり、山潟小学校は住職の母校でもあります。

廃校になった母校に再びあかりが灯り、これから人が集う場所として賑わうことをこころより楽しみにしておりますし、一緒に盛上げてゆければと思っております。

大室 由佳さん プロフィール

一九七九年 福島市生まれ。保育士。

Roots 猪苗代 アウトドアショップ 「FLAME」 マネージャー。Roots プレーパーク 「グロンボロンの森」プレリーダー。

大学卒業後、羽根木プレーパークに「二年間ボランティア」として関わる。その後、東京の民間会社で野外教育活動に携わる。

二〇一二年、「森のようちえん」を運営するNPO 法人で働く。二〇一五年、新潟市委託事業「Akiba マウンテンプレーパーク」の立ち上げに関わる。

二〇一八年、Roots 猪苗代にて「Roots の森プレーパーク」の活動を始める。



Roots 猪苗代ホームページ
<http://roots.jp/>

